

「台湾との国際定期便」

国内人口の減少が続く中、訪日旅行者の全国展開により地域の活性化を目指す動きが活発となっており、空港のゲートウェイとしての役割が一段と高まっている。お隣の仙台空港では、7月から全国初の民営化がスタートし、今後LCC誘致などによる訪日客の大幅増加を目指す。青森空港や秋田空港も国際線の充実に力を入れる。全国では、国際線の誘致・充実に視野をターミナルビルの増築等に取り組み空港も目立ち、空港間での国際線の綱引き競争は激しさを増している。

いわて花巻空港では、台湾の中華航空（チャイナエアライン）がチャーター便を運航しており、来春からの季節定期便（春夏秋冬の季節ごとにそれぞれ2か月、週2便を運航）の就航にも強い意欲を示す。

中華航空グループは台湾最大の航空会社で、岩手や北東北の自然・文化・食などの観光資源への関心も強く、就航先としてのいわて花巻空港を高く評価している。

平成24年からは知事ミッション団が毎年、また、これとは別に県関係者やホテル・旅館関係者等が頻繁に台湾を訪問し、中華

航空や旅行エージェント等にチャーター便の充実や定期便化を粘り強く要望し、信頼関係を築いてきた。

これを受けて、一昨年からは、台湾・岩手双方のお客様が乗り合う定期チャーター便が新たに加わり、多くの皆様が相互に訪問し、観光や様々な交流を行っている。

この5月には、春の定期チャーター便で、達増知事や谷村県空港利用促進協議会会長を先頭に60人を超える大ミッション団が台湾を訪問し、当方も参加させて頂いた。訪問団は、中華航空をはじめ、台湾政府の交通局・観光局、立法院、観光協会、経済団体などを精力的に訪問し定期便就航を強く働きかけた。

長い交流の積み重ねで旧知の方も多く、訪問先では温かい歓迎と応援を頂いたが、特に中華航空での歓迎は熱烈であった。「春秋の定期チャーターを踏まえ、11月頃には来年の季節定期便を判断する」との具体的な話も出て、団員は要望活動が正念場にあることを実感した。中華航空を含め各分野の来賓を招いた観光レセプションも別途盛大に催されたが、岩手に向けた熱い思いの来



岩手県空港ターミナルビル株式会社
代表取締役社長

中田 光雄

賓挨拶の連続で、交流の広がりを感じた。いわて花巻空港では、この春、国際線カウンターの出国待合室、入国審査場、免税店等が新增設され、国際線の受け入れ態勢が格段に充実した。国際線業務を担うスタッフの意欲も十分である。

残る課題は、台湾へのアウトバウンド客である。平成12年度から昨年度までの累計で、インバウンド客は12・5万人の一方、アウトバウンド客は16万人である。今回の訪問先でも「岩手からもっと来て欲しい」との声が多く聞かれた。外国客に訪問してもらい国内活性化を図りたい思いは台湾も同じである。台湾は、後藤新平や新渡戸稲造など岩手の先人の足跡、故宮博物院、産業や街・人の元氣、食の多様さなど大変魅力に溢れている。いろいろな分野でのビジネスチャンスも期待できる。桃園空港をハブとして岩手が中国・東南アジアなどつながるメリットも極めて大きい。

秋の定期チャーターの実績が来春の季節定期便の実現に直結する。ぜひ、この秋には多くの皆様にいわて花巻空港から台湾にお出かけ願いたい。